

愛・地球博で 恵那市をPR



恵那トビはしご登りの気迫のこもった演技

地上七層のはしごの上、空中をじっと見つめる観客。演じ手の緊迫した空気が観客に伝わり息をのむ。決めのポーズが決まると湧き上がる拍手と歓声。五月十三日、名古屋市中区で開催されている「愛・地球博」で岐阜県の日が開催され、会場のEXPOドームには延べ六千四百人を超える観客が来場しました。恵那市からは恵那トビはしご登りと串原の中山太鼓が出演し、気迫のこもった演技で観客を沸かせました。

空中に舞う華麗な演技

恵那市消防団

愛・地球博「岐阜県の日」の前半に登場した恵那トビはしご登り（恵那市消防団長伊藤春正さん）は、総勢百十七人が参加し、はしごを六基立て、お祝いに演ずる「鶴亀の舞」や難易度の高い「一本背亀」など二十八演技を華麗に披露しました。

▼恵那トビはしご登りは、大正から昭和初期に行われていた階梯操法を起源とし、昭和五十七年市消防団発足二十五周年を記念して復活しました。その後名称を正式に「恵那トビはしご登り」とし、市消防団に所属し消防団長の指揮下に置かれ、昭和五十八年から出初め式で新年を祝う風物詩として観客を楽しませていました。

はしご登りは、七層という高所における技の披露で専門的な技術の習得は大変難しく、精神力、体力などを求められ、登り手と持ち手の息が技を披露しています。

合わせないと演技ができません。こうしたはしご登りの練習を通じて消防団員の活力、団結力、精神力を養って消防団活動に貢献しています。

世代を受け継ぐ一体感

中山太鼓保存会

「岐阜県の日」の最後を飾った中山太鼓は、中学生十九人を含む保存会六十三人が参加し、代表的な四曲を披露しました。クライマックスの神ばやしでは、太鼓の打ち手が順にステージに駆け上がり、ステージ上で跳ね、回り打ちする場面は、世代を超え出演者が一体となりました。

▼中山太鼓は、串原の総氏神、中山神社に古くから奉納される神楽太鼓で、県の重要無形民俗文化財に指定されています。この太鼓は、毎年十月第三日曜日の例祭に六頭の花馬とともに奉納される大太鼓、締め太鼓、横笛で構成される六組の打ちばやし組が太鼓を打ち鳴らし五穀豊穡、無病息災を祈願します。代表曲は、非常召集合図の「寄せ太鼓」、戦勝祈願の「宮入り」、戦に勝った武士たちが狂乱舞舞して祝い打った「神ばやし」、神に感謝の誠を捧げる「神納め」があります。

中山太鼓の起源は戦国時代の武田勝頼軍の美濃侵攻に始まると伝えられ、大太鼓はこぶしに似せたすりこ木状のばちを使い、締め太鼓は矢に似せた細長い竹のばちを火で清めて打つことが特徴になっています。中山太鼓保存会（会長三宅通昭さん）は昭和五十二年に組織され、伝統を次世代に伝える活動をしており、国立劇場、大阪花の万博をはじめ、マレーシアでも公演の経験を持っています。地元串原中学校では生徒全員が総合学習で太鼓の指導を受け、卒業式では免許状が授与されるなど着実に次世代へ受け継がれています。

地域で受け継がれる伝統文化は、恵那市の魅力としてわたしたちの自慢の一つとなります。可見市の花フェスタぎふ2005では五月三十日から六月一日の間、先の二つの団体に加え、美濃国岩村城女太鼓、剣の舞毛呂窪民芸保存会、山岡白山比叡神社獅子舞保存会、大井恵那峡とんとん節保存会、明智太鼓保存会、上矢作横道獅子舞保存会などの皆さんが恵那市の魅力をPRします。



全員が一体となり繰り広げる「神ばやし」の回り打ちと花馬（右端）